

奔放な色彩と動き

若者に感動と希望を与える詩と絵画



山田かまち▶



山田かまち水彩デッサン美術館
高崎市片岡町 3-23-5 TEL.027-324-3890
午前 10 時～午後 6 時（最終入館 5 時 30 分）
入館料 一般 500 円、小中高 200 円
毎週水曜日休館（祝祭日は開館）
◀プリーズ・ミスター・ポストマン

夭折の芸術家 山田かまち

「激しく美しく生きる」。17歳で世を去った「山田かまち」が残した詩と絵画は、若者の心を揺り動かし、感動と希望を与えている。生きることとは何か、自分とは何か、かまちの言葉が鮮烈に、そしてひりひりとした痛みとともに心に刻み込まれ、魂からあふれ出した奔放な色彩に引き込まれていく。

●幼い頃から絵に熱中

昭和35年（1960）7月、山田かまちは高崎市に生まれ、倉賀野町で育った。「かまち」という名は『日本歴史物語』に書かれていた少年「鹿麻知」から父親が名付けた。1歳の頃から絵を描き始め、幼い頃から才能の片鱗を見せた。自宅の庭で昆虫やトカゲを這うようにじつと観察し、

鳥や魚に熱中し、飽くことなく広告の裏に描き続けた。ジャングル大帝やウルトラマン、恐竜や地球の歴史も、かまちのお気に入りだったという。その当時の作品は焚き付けに使われ残っていないが、周囲の大人を驚かせ

た。父親が同僚に見せたら「子どもに書けるはずがない」と一蹴されたという。

●光琳や宗達に匹敵するようになるかもしれない

小学生の頃から、かまちの個性は枠を越え担任の教師は手を焼いたようだ。友達からは人気があり、休み時間になると怪物を描いてほしいとかまちの回りに集まった。

小学校3年生の時、かまちはテスト用紙の裏に鉛筆で水牛を描いた。テストよりも水牛に集中していたことがすぐにわかった。担任の竹内先生はかまちの才能に目をみはった。その年、竹内先生は、かまちは一夜で描いた32枚の動物画を持ち、かまちを連れて、芸術に造詣が深く高崎の発展に尽力した井上房一郎氏を訪ねた。井上氏は「大変な少年だ。うまく伸ばせば光琳や宗達に匹敵するようになるかもしれない」とかまちの才能を絶賛したという。

●ぼくは24時間では足りない

小学校5年生の時、かまちはステレオを買ってもらい、抱きかかえるよ

うにしながらカラヤンを聴いた。中学校に上がる春休み、かまちは「ぼくは二十四時間じゃ足りないよ」と母親に話しかけた。ビートルズの音楽に出会い「年齢を超えて感動できるロックを僕は作りたい」と燃えるような言葉で語っていたという。

高校受験に失敗したかまちは予備校に通い、一人の女性に恋をする。「愛いちばんすばらしいもの」と、書き記し、情熱的な作品を残している。

昭和52年、高崎高校に入学したかまちは、誕生日にエレキギターを買ってもらった。その爆音は、母親を当惑させた。8月10日、昼の食事ができたと母親が2階のかまちに声をかけた。返事がないのをいぶかしく思い、母親が部屋のドアを開けると、エレキギターを抱えたまま、かまちは倒れていた。足もとには汗で濡れたTシャツが脱ぎ捨てられていた。

かまちは葬儀には、かまちの幼なじみで、後にボウイの水室京介と松井常松が訪れた。水室が言った。「かまちはハードロックでした」。かまちの部屋のベッドの下からおびただしい数のスケッチブックと大学ノートが見つかった。